

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

弥生時代中期から晩期にかけての集落群である「幅・津留遺跡」。発掘に入り七年経つそうです。

建設予定道路面積部分の発掘でしかないのに、その出土品の多さと、石器から鉄器に至るといふ時代を映すかのような種類の豊富さにおどろかされます。

最近発掘された墓地群を見ると、整然と東西に並び、子供達の墓地であるそうです。

古代の人々の、東より日いでて西に沈む太陽の動向になぞらえ、悲しみの中に東西に墓地を構え、新しい生命の来る事を願い送ったであろう、墓地跡を見ることができそうです。ただただその数の多さに驚く一方、副葬品はほとんど無く、真つ赤なベンガラを用いています。

この墓地の多さからみて、かなりの人口をもった集落があったと予想され、集落という表現より「大都市」の方が的確な表現かも知れません。

現在発掘過程での注目点は、中国の書「三国志」のなかの「魏志倭人伝」に出てくる「倭」の国に対しての表現が、「幅・津留遺跡」の出土品と似ており、その規模の大きさから「魏志倭人伝」に出てくる「クニ」であるのかも知れません。まだ発掘途中であり、鉄を鑄る釜など大型のものは発見されていません。

しかし東西のムラには、石の立柱が根子岳に向かって立っており、それは特別な意味をもつものとされています。この立柱が指す根子岳の前面に、大型の釜戸跡があります。

まだ調査はされず、地権者からの連絡で私が見ただけにすぎず、現在はそのままに埋め戻されています。

その釜戸跡と思われる地点から、農地の表面に露出した石器や土器片を見つけることができます。以前書いた「上色見年の祢神社」のすぐ上の畑ですが、その付近から純金のかけらも出土しています。



▲幅・津留遺跡（高森・津留）

この幅・津留遺跡は、その面積、規模からして、佐賀県の吉野ヶ里遺跡をしのぐものだそうです。これだけの規模を有した遺跡の存在は日本古代史に、新たなページを書き添えるものなのかも知れません。

幅・津留遺跡の真横に当たる地点、国道沿いに「豆塚」と言われる古墳があります。その真横、川を挟み色見にも一基あります。まだ調査はされておらず、町指定の文化財

になっていてだけですが、この遺跡群との関連から考えると、おもしろい結果を導き出すものだと思います。この塚は年代もわかっておらず、ただ豆塚と呼ばれておりました。

先に子供の墓地を書きましたが、それは集合墓地として子供用の塚しかまだ出てきていないからです。このムラを治めた人達の墓地はまだ発見されておらず、周辺地域からそのような塚の存在を示す様な個所は、まだ見つかっていません。

私達が親しみを込めて呼んでいた豆塚が、この「幅・津留遺跡」の象徴的なものとすれば、あの位置に存在する事もうなずけます。ちょうど時代的に「女王卑弥呼」が登場する時代です。

幅・津留遺跡は、弥生時代をもって終わります。その後に興る古墳時代の遺跡。

高森中央小学校から上色見大村古墳、そして草部吉見神社周辺に点在する遺跡群。南阿蘇村一帯にも影響をもたらした、幅・津留遺跡の先人達。古代史においては、どこよりこの地域の優位性が指摘されており、新しい歴史のページを開くのかも知れません。